

山本周五郎
深川安樂亭



ふか がわ あん ら
深 川 安 子

新潮文庫



昭和四十八年十一月三十日 発行
平成三年一月二十五日 三十刷

著 者 山 本 周 五 郎
やま もと しゅうご ろう

発行者 佐 藤 亮 一
さとう りょういち

発行所 株式 新 潮 社
かぶしき しょうせう しゃ

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)三二六六―五一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇
振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社三秀舎 製本・加藤製本株式会社
© Tôru Shimizu 1973 Printed in Japan

ISBN4-10-113424-3 C0193

新潮文庫

深川安楽亭

山本国太郎著



新潮社版

2155

目次

内蔵允留守	七
蜜柑	二九
おかよ	五五
水の下の石	七一
上野介正信	九一
真説客齋記	一一
百足ちがい	一三五
四人囃し	一八五
深川安楽亭	二〇九

あすなろう……………	二七
十八条乙……………	三五
枅落し……………	三九

解説 木村久邇典

深川安樂亭

内く
蔵ら
允すけ
留
守

一

岡田虎之助は道が二岐またになっているところまで来て立ちどまり、じつとりと汗の滲にじみ出ている白い額を、手の甲で押し拭ぬぐいながら、笠かさをあげて当惑なやそうに左右を眺めやった。……その平地はなだらかな二つの丘陵のあいだにひらけていた。八月すえだというのに灼やけつくような午後で、人の背丈せたいほども伸びた雑草や、遠く近く点々と繁しげっている森や疎林のうえに、ぎらぎらと照りつける陽ひざしは眼に痛いほどだった。ところどころ開墾かいしはじめた土地が見えるけれど、大部分はまだ叢林そうりんの蔓はひるにまかせた荒地で、ことに平地の中央を流れる目黒川は年々ひどく氾濫はんらんするため、兩岸には赭あかい砂礫されきの層が広く露出していた。

「……さて、どう搜たづねたものか」途方にくれてそう呟つぶやいたとき、虎之助はふと眼をほそめて向うを見た。白く乾いた埃ほこり立った道を、こちらへ来る人影が眼についたのだ、笥たけ笠のこがさを冠かぶり、竹籠たけかごを背負っている、付近の農夫でもあるかと思っていると、近寄って来たのは十七八になる娘だった、虎之助は側へ来るのを待って、

「少々ものを訊たずねる」と、声をかけた。

「……はい」娘は笠をぬいだ。

「このあたりに別所内蔵允先生のお住居すまいがあると聞いてまいったが、もし知っていたら教えてくれまいか」

「はい、存じております」娘は齒切れのいい声で、「……先生のお住居でしたら、あれあの森の向うでございます、彼処あそこにいま掘り返してある土が見えましよう、あの手前を右へはいった森の蔭かげでございます」

「忝かたじけない、足を止めて済すまなかった」虎之助は会釈をして娘と別れた。

彼は近江国蒲生郡の郷土の子で、幼少の頃から刀法に長じ、近藤斎いっきという畿内きないでは指折りの兵法家の教えを受けていたが、この夏のはじめに皆伝を許され、これ以上は江戸の別所内蔵允おのどのに就ついて秘奥ひおうを学ぶようと、添書もろを貰もらって出て来たのであった。……別所内蔵允は天真正伝流の名人で、曾かつて將軍家光から師範に懇望されたこともあるが、既に柳生やぎゅう、小野おのの二家がある以上は無用のことだと云って受けず、その氣骨と特異の刀法を以て当代の一勢力を成していた。虎之助はむろんその盛名を聞いていたから、勇んで江戸へ来たのであるが、そのときすでに内蔵允は道場を去り、目黒の里に隠棲いんせいした後であつた。それで旅装を改める暇もなく、直すぐに此処ここへ尋ねて来たのだが、予想したより辺鄙へんびな片田舎かたいなかで、何処どこをどう捜してよいか見当もつかないのである。

教えられたとおりの四五町あまり行くと、右手に土を掘り返したかなり広い開墾地があつて、半裸になった一人の老農夫が、せつせと鍬くわを振ふるっていた。虎之助は念のために、その老人に声をかけて道を慥たじかめた。

「そうでございます」老人は鍬をとめて振返つた、「……それは此処をはいって、あの森沿いの窪地くぼちへ下りたところでござりますが、先生はいまお留守のようでございますぞ」

「お留守、……と云うと」

「此処へ移ってみえたのが二月、それから五十日ほどすると、ふらっと何処かへお出掛けになつたきり、いまだにお帰りが無いようすでござります」

「然し門人なり留守の方がおられよう」

「門人衆という訳ではありませんが、先生のお留守に來た御修業者が五人、お帰りを待つて滞在しておられますようで、ひと頃は十四五人も居られましたがな、いまは五人だけお泊りのようでござります」

「老人はこの御近所にお住いか」

「はい、あの栗林くりばやしの向うに見えるのが、わたくしの家でござります」

虎之助は老人に礼を云つて、小徑こみちへ入った。……ようやく尋ね当てたのに、此処でもまたその人は留守だという、然し同じように尋ねて來た修業者たちが、内蔵允の帰宅を待つて滞在しているというのなら、自分も待たせて貰えるであらう。そう思いながら、草の実のはぜる細い小徑をたどつて行つた。杉の森について百歩ほど入ると、左手に閑雅に古びた木戸があり、「別所内蔵允」と書いた小さな名札が打ちつけてある。それを入れて、竹藪たけくさに囲まれた道をなだらかに窪地へ下りると、一棟むねの貧しげな農家が建っている。そしていまでも、その前庭になつてゐる広場で四五人の壮夫が、矢声やこゑ烈しく木劍きけんの試合をしていたが、虎之助が笠をとりながら静かに近寄るのを見ると、一斉に手を控えて振返つた。

二

「……なにか御用か」

色の浅黒い、巖のような肩つきをした大きな男が、虎之助の方へやって来た。左の眉尻に指頭大の黒子がある、彼は虎之助が鄭重に來意を述べるのを、みなまで聞かず、手を左右に振りながら、

「ああ駄目だ駄目だ」と、さも面倒くさそうに云った、「……せつかくだが先生はお留守だ、また改めて来るがいい」

「御不在のことは承知です」無作法な挨拶に虎之助はむっとしたが、それでもなお静かに続けた、「然し貴殿方もお帰りを待っておられるとのことゆえ、できるなら拙者もお住居の端なり、置いて頂こうと存じてまいったのです」

「いかにも、我々もお帰りを待っているには相違ない、然し此処はお救い小屋ではないからな、そうむやみに誰でも彼でも転げ込むという訳にはゆかんぞ」

まるで喧嘩腰の応待だった。

「ではなにか条件でもございますか」

「されば、別所先生はそこらに有触れた町道場の師範などとは違う、先生の鞭を受けようとするには、少なくとも一流にぬきんでた腕がなくてはならん、だから、もし達てお帰りを待ちたいと申すなら、我々と此処で一本勝負をするのだ、そのうえで資格ありと認めたら、我々の門中へ加

えて進ぜよう」

「それは先生のお定めになった事ですか」

「いいえ違いますぞ」ふいにそう云う声がして、向うから一人の老人がやって来た、恐らくこの家の老僕であろう、六十あまりの小柄な軀つきで、鬚髪はもう雪のように白かった、「先生は留守にみえた方は、どなたに限らずお泊め申して置けと仰しやうござりました」

「うるさい、おまえは黙っておれ」黒子の男は暴々しく遮った、「……例え先生がどう仰しやうであろうと、こうして神谷小十郎が留守をお預かり申すからは、つまらぬ者をひき入れる訳にはまいらんのだ、我々と此処で立合うか、さもなくば出直して来るか、孰れとも貴公の心任せにされい」

「その生白い面ではよう勝負はせまいて」そう罵る者があつた。

「おおかた草鞋錢でも欲しいのじやろ、そんなら二三文くれて追ひ払うがいい」

向うにいる連中が悪口を叩いた。虎之助は呆れた、そして怒るよりも寧ろ笑いたくなった、こんな相手と押し問答をしてもしょうがない、「では、また改めてまいるとしましょう」そう云つて彼はしづかに踵を返した。

遠慮もなく罵り嗤う声を聞流して、森蔭の徑を戻つて来ると、先刻の老農夫はまだせせと鋤を振っていた。虎之助は礼を述べて行過ぎようとしたが、その老人は鋤の手を休めながら、「どうなされました」と不審そうに訊いた、「……先生のお帰りをお待ちなさるのではなかったのですか」

「その積りでいったのだが」

「暴れ者になにか云われましたか」老人は案の定という笑い方をした、「……あのや、まだ、共は手に負えぬ奴等じゃで、まあ喧嘩もせずに戻って来られたのがなによりでござりましょう」

「御老人も知っておられるか」

「留守番の弥助どのからよく聞きまするし、この辺をのし歩くので顔もよく存じております、あのようなあ、ぶれ者が殖えるばかりで困りものでござります」

虎之助は去ろうとしたがふと、

「御老人」と思いついて云った、「……実は、先生のお帰りまで待ちたいので、ぜひこの付近に宿を借りたいと思うのだが、むろん雑用は払うしどんな家の片隅でもよい、置いてくれるところは有るまいか」

「御覧のとおりこの辺はまるで人家もなし、さようでございますな」老人は眼を細めて四辺を見やったが、「……もし貴方さまさえ御辛抱なさるお積りなら、汚のうございますが私の家にお泊りなさいませぬか、孫と二人暮しでお世話もなにも出来ませぬが、それで宜しかったらお宿を致しましょう」

「忝ない、そう願えれば此の上もない仕合せだ、決して迷惑は掛けぬから頼む」

こうして思い懸けぬところで宿は定まった。

老人の家はさっき教えられた通り、其処から荒地つづきに、二反ほど北へ入った栗林の中にあつた。内蔵允の屋敷に近いから、帰宅すれば直ぐに分るだろうし、また老人と留守番の下僕とが

往来しているようすなので、旅からの消息も聞くことができるであろう。これなら留守宅に待つと同じことだ。虎之助はほっとしながら老人の家へ向ったが、栗林のあいだの道を、農家の前庭へ出たとたんに、右手の洗場から立って来た一人の娘と顔を見合せ、両方でおやと眼を瞠みはった。さつき道で内蔵允の家を教えてくれた娘である、虎之助は直ぐに老人が孫と言ったのはこの娘だということに気づいた、それで、静かに笑いながら会釈した。

「思わぬ御縁で、今日からこちらへ御世話になることになりました、岡田虎之助という者です」娘は僅かに頬ほおを染めながら、けれども齒切れのいい口調で答えた。

「ようおいでなされました、わたくし奈美と申します」

三

「お客さま、御膳のお支度ができました」

虎之助はそう呼ばれてようやく眼を覚さました。……だいぶ寝過したらしく、強い陽ざしの反射が部屋の中でも眩まぶしく感じられる。骨が伸びると云いたいほどの熟睡じゆくすいの後で、軀からだじゆうに快い力感が甦よみがえっているのを感じながら、虎之助は元気よく起きて洗面に出た。

「あんまりよくお睡ねむりになっているので、お起こし申すのがお気の毒でございました」

「よく寝ました、ずっと旅を続けて来たのでいっぺんに疲れが出たのでしょう、ああ、栗がよく実っていますね」

「わせ栗ですから、もう間もなくはぜますでしょう」

娘は手水盥に、川から引いた清冽な水を汲み、甲斐がいしく虎之助の洗面の世話をしながら、この付近が栗の名産地であることを語った。……年はまだ十七八であろう、肉付のきりつと緊つた、どちらかという和小柄な軀で、熟れた葡萄のように艶々しい表情の多い眸子と、笑うと笑窪の出る豊かな双頬がたいそう眼を惹いた。昨夜聞いたところに依ると、老人の名は閑右衛門、豊島郡の方に古くから百姓を営んでいたが、去年隠居をして孫娘と二人此処へ移って来た。隠居はしたが労働が身に付いているので、安閑と遊んでいることができず、果樹を育てたり、少しずつ耕地の開墾をしているのだということだった。——死ぬまでには一町歩も拓けましようかな。老人はそう云って笑った。

「お祖父さんと二人きりでは淋しくありませんか」

「ええ淋しゅうございますわ」奈美は素直に頷いた、「……ですから、岡田さまがいつまでも泊っていて下さるといいと思いますの」

「別所先生がお帰りになるまでは、三月でも半年でも御厄介になっていますよ」

「嬉しゅうございますわ」娘は大きく眼を睜りながら、「……先生のお留守宅に厭な浪人たちが来ていますでしょう、お祖父さまと二人きりですから心配でしょうがなかったのですけれど、岡田さまがいて下されば安心ですわ」

「それでは番人という役ですね」

「いいえ、いいえ、そんな積りで申したのではございませんわ、ただ心丈夫だと思ったものですから」